

同化現象と文明

——言語メディアによるコミュニケーション

河 底 尚 吾

1

私たちが「混沌」状態におち入ったり、はからずも「迷路」にふみこんでしまったりしたとき、それらの困難を解決したり、あるいは脱出しようとするれば、私たちの目ざす方向は現在および将来に対してであり、過去に対してではないことは明らかである。ところが、そのような「混沌」や「迷路」が結果した原因を知ろうとするれば、必然的に過去へ目を向けざるをえないだろう。おなじく問題解決といっても、この両者の相異は注目すべきである。なぜなら、そこには時系列と場系列との微妙な交錯が見られるからである。その交錯状態を理解する例として、Sophoclesの『オイディプス王』はなによりも典型的なパラダイムを提供してくれる。まず、わかりやすい例からあげてみよう。

若者オイディプスが、久しく住みなれた町コリントスですてて、テーバイの町へ来たとき、その町の人びとは怪物スフィンクスの災害になやまされていた。その災害とは、町のだれかれなしにスフィンクスが問を發し、その間に答えられない者は即座に怪物の餌食にされることであつた。オイディプスはこれに挑戦し、みごとその問を解いてみせた。まさか人間に自分の問が解けるとは思ってもいなかったスフィンクスは、驚愕と恥辱のあまり岩山から墜落して息絶えた。そのとき、この怪物が發した問とは、

「声はひとつだが、足は二本のときもあり、三本のときもあり、四本のときもあつて、もっとも多いときにもっとも弱いもの、これはなにか。」¹⁾ というもので、またオイディプスはこれに対し、「それは人間だ。なぜなら人間は幼児のときには四つん這いで、成人すれば二本の足で立ち、老齢になれば杖をたよりにする。」と答えたという。この問が巷間伝えられるように、「朝は四本足、昼は二本足、夜になれば三本足で歩くものはなにか。」と言いかえても、問題の性質はなんら変らない。私たちはこういう種類の問を“謎”と呼んでいる。

スフィンクスは謎をかけ、オイディプスはその謎をみごとに解いたわけであるが、謎は単なる疑問ではないところに、謎を解くカギがひそんでいると思われる。スフィンクスがなげかける謎は、ただ知らないことを知ればすむだけの単純な問ではない。謎はカオスと迷路とをあわせもつ重層構造によって成りたっている。カオスがなんであるかを知るためには、途方もない（と思われる）迷路を切りぬけて行かねばならないのである。しかもその探求の方向はカオスへ向けられている。無事にカオスへたどりついたとしても、そのカオスはそのまゝ解答ではないので、そこでさらにあらたな探求がはじまる。カオスの解明は容易ではないが、仮に解明されたとしてもけつしてその解答は一つではないだろう。極端に言うならば、その解答を見つ

け出した者の各人は、それぞれ相異なる解答をえている可能性がある。カオスとはそれほど形の定まらないものなのだ。謎はそのすべてがカオスではないから、カオスほど個性的な要素の集合体とは言えないにしても、不確定の要素は十分にそなえている。スフィンクスが提出した謎に、はたして正解はあるのか、そのような疑問もふくめて、この世に正解を知っているのはスフィンクス自身のほかにだれもない。この女怪が発する問および人間たちの答は、いっさい彼女が支配しており、その支配圏内に人間のだれをも寄せつけない。彼女はただ問を發し、その答がなんであろうと、彼女の恣意のままに、その答を不正として片づけることもできる。ところが幸か不幸か、オイディプスが姿をあらわすまでは、彼女だけがひそかに知っている正解をだれも口にする者はいなかった。たとえいたとしても、スフィンクスはそれを無視しつづけ、ともかくテーバイの市民たちを苦しめなければならなかった。それが彼女に課せられた重要な任務だったのである。というのは、テーバイの国王ラーイオスが生前、クリューシッポスという少年をピーサから誘拐したことに対し、ヘーラー女神が怒ってこれに報復しようと、わざわざエチオピアのかなたから彼女をテーバイに呼びよせ、ラーイオスの市民たちに災危を与えることにしたからである。スフィンクスとしては面目にかけても任務をはたさねばならなかったし、またその謎は学芸神ムーサイから教えられたものであったから、絶対に解かれぬという自信も抱いていた。事実、その謎を解くことができる者はいなかった。しかし、オイディプスがそれを解いた。なぜ彼がそれを解いたのか。彼は父ラーイオスを殺害し、母イオカステを妻とする、というアポロン神の予言の実行者として運命づけられていたからにはかならない。スフィンクスの謎（あるいはヘーラー女神の報復）は、その予言を実現する一つの重要な布石であったのである。彼は謎を解いてスフィンクスを谷間に墜死させ、その報酬と

してテーバイの国王となり、先王の後イオカステを自分の妻にむかえた。このような一連のできごとは、すでにアポロンによって予言されていたし、オイディプスもそれを知らされていた。しかし、彼がえらんだ行動は、予言とはまったく別の方向へ進むはずであった。そのことについて、もうすこしくわしく経緯を分析しておこう。

まずはじめにオイディプスがデルポイで直接うかがった神託とは、アポロドーロスの伝えるところによれば、神は彼に「自分の故郷に赴くなかれ、父を殺し母と交るであろうから」と言ったというのである²⁾。赤児のときからコリントス王の宮廷で育てられたオイディプスが、この神託を聞いて、「自分の故郷」をコリントス、「父」をコリントス王ポリュボス、「母」を王の妻ペリポイアと解釈したのはきわめて自然であったと私は思う。しかし、そこに予言への迷路が織りこまれているのである。実際には彼の生みの親はラーイオスとイオカステであり、ラーイオスもまた「生まれてくる男子は父親殺しになるであろう」という神託によって、オイディプスが生まれるとすぐさま山に棄てたのであった。それを羊飼いが救って、自分の領主に届けた結果、コリントス王ポリュボスと妻ペリポイアが育ての親となったわけである。ラーイオスから見れば、存在しないはずの息子が存在し、もはや自分を殺すはずがない息子によって殺されるとは夢にも思っていなかった。殺す方も殺される方も、はじめから結果を知っていた。それだからこそ、両人ともその結果を回避するために別の結果を目ざして行動したのである。しかし、その別の結果は元の結果（予言）へと収束し、回避した行動の目的は既知の目的（予言）とかさなりあう。ここにも予言への迷路がはりめぐらされていることを私たちは知るのである。これまでのことについて、ラーイオス (L.) とオイディプス (O.) を軸にして、それぞれの予言の経過と結果の関係をまとめるとつぎのようになる。

(1) [予言]

- L.一息子に殺害される
- O.一父を殺害し母を妻にする

(2) [経過]

- a) L.—O.を遺棄
 - O.—延命
- b) L.—スフィンクス災禍の原因
 - O.—スフィンクス災禍を解消
- c) L.—テーバイを出国
 - O.—コリントスを棄てテーバイへ入国

(3) [結果]

- L.一息子に殺害される
- O.一父を殺害し母を妻にする

これでもわかるとおり、予言と結果は回帰的に同一である。それは或る意味では当然のことであろう。予言、一般的には予測、とは結果をあらかじめ定立することだからである。しかし、現実には予測どおりにものごと結果するとはかぎらない。オイディプスのように、はじめから予言（特定された予測）が実現されることを拒否した行動をとったばあいでも、行動するかぎり迷路を避けてとおることはできない。それは、人間は将来かならず死ぬとわかっている、そこに至るまでに、さまざまな数多くの迷路を通過しなければならないという事実によって、端的に証明されるだろう。ラーイオスもオイディプスも「死」という結果を知っていて、それを拒否する道をえらんだ。この意思決定は自然であるが、彼らの選択は彼らの気づかない重大な過誤にもとづいていた。しかし彼らは自分たちがえらんだ道は、自分たちが目的とする方向へ通じているのであり、すくなくとも予言された方向に自分たちが進んでいるのではないと確信していた。彼らの過誤とは、ラーイオスのばあいは、生んではならない男児を生み、それを遺棄したことであり、オイディプスのばあいは、もどってはならない故国テーバイへもどったことである。それらの選択行為は、彼らが予言にさからってそうしたということではなく、むしろ予言に忠実に従った結果なのであ

る。

予言は神から人間に与えられた情報である。予言を否定したり無視することはやさしい。もちろん、今日私たちのだれも予言など信じる者はいないだろう。予言には科学的根拠はないし、客観的な資料にもとづく信憑性もない。古代人は古代の宗教がおよぼす生活圏内で、日常的に宗教的予言を信じたということなのかもしれない。また現代の私たちは、科学がおよぼす生活圏で、科学的情報を日常的に信じているということなのだろう。しかし、両者はいずれも情報であることにはまちがいない。言語メディアを通じて一方から他方へメッセージが送られ、それを解釈し理解するという情報のしくみは、デルポイの巫女が三脚台に坐して口走る神託を、傍にひかえている神官が鉛板に書きとりそれを信者に伝え、解釈し理解するというしくみと共通するし、現代のテレビジョン、ラジオ、新聞、プリント、さらには電話、パソコン、光通信等を駆使してメッセージを伝達し、解釈し理解するしくみとも共通する。その情報がどんな種類のものであれ、またどんな性質のものであっても、発信→伝達→受信→解釈→理解という一連の通路を経由してもたらされるものは、広く“情報”と呼んでさしつかえない。

予言が言語メディアの情報であるなら、オイディプスはその情報の解釈の点では過誤はなかったと言えるだろう。しかし過誤といえば彼が受信した情報は、彼がもとめていた情報ではないことに彼は気づくべきであった。なぜなら、彼が神託で知りたかったことは、「自分の真の両親はだれか」というところにあり、それ以外になかったのであるから³⁾。したがって、「自分の故郷に赴くなかれ、父を殺し母と交るであろう」という情報は、彼にとって唐突であり奇異な感じを与えたはずだ。R. Gravesはその点を考慮してか、彼が神託をうける理由を「どのような未来が彼をまちうけているのか」(what future lay in store for him) といぐあいに、神託と辻つまがあうように記述している⁴⁾。しか

し神託の内容には変りはない。いずれにしてもオイディプスとしては、出生が明らかでない以上、現在住んでいるコリントスを「自分の故郷」と考えざるをえないので、彼の解釈は入手した情報に忠実であればあるほど、《コリントスから遠ざかれ》という結論になるし、それが彼を迷路に足をふみこませる第一歩となった。ラーイオスのばあいは、「男児を生んではならない。生まれてくる息子は父を殺す」⁵⁾という予言にさからって、男児をもうけたことが過誤の一つである。さらにその過ちに気づいた彼は、赤児の踵に鉄串を突きさし、身うごきできないようにして山中に棄てさせたというのが、もう一つの重大な過誤であった。なぜなら、赤児を身うごきできないようにして遺棄しても、死ぬとはかぎらないからである。これは情報の誤解ではなく、彼自身の予測の誤ちであり、それが彼を迷路に入りこませることになったのである。

二人はほとんど時をおなじくして行動を開始し、まさしく迷路の象徴とも言うべきポーキスの三差路あたりで二人は遭遇する。そのときすでに二人とも進むに進めず、退くに退けずという完全に迷路におちこんだ状態にあり、たがいに道をゆずることができず、ついに力にまさるオイディプスがラーイオスを馬上からひきづりおろし、これを殺害した。その瞬間予言の一つは着実に実現されたのである。こうしてオイディプスは暴力によって、父の殺害という異常な代価をはらい、彼の迷路を脱出する。

つづいて彼はテーバイの町に入り、先にのべたスフィンクスの謎との対決に直面することになるが、そこでも謎を解くことによって、スフィンクスを死に至らしめ、彼はアポリアから脱出する。その結果、彼は残されたもう一つの予言、すなわち、テーバイ王となって、夫をうしなった母を妻としてむかえる、という目的を運命のままに達成するのである。ここまではたしかにオイディプスの行動は、時系列にそって進行している。彼は未来に向かって前進しつづけるだけであった。しかし彼が王位につき、前

王の后を自分の妻にむかえたということは、予言の虚構性を現実化したことにはほかならない。つまり、オイディプスによって回避された予言は、もはや彼にとっては反古同然なのである。「故郷にもどれば、父を殺し母を妻にする」という予言の文脈は、彼によってうち消され、現実の彼の行動を記録するなら、「コリントスを去り、男を殺し、后を妻にした」という文脈で書かれなければならない。彼の文脈のなかには、「故郷」も「父」も「母」も存在しないのである。彼が自発的に選択し、行動する過程には、なにも反復したり重複したりする要素はふくまれない。彼がコリントスをあとにしてから先王の后と結婚するまで、すべて彼にとっては自分の力で選択し決意し実行しなければならないべきごとの連続であった。彼は困難と思われたいくつものアポリアをくぐりぬけ、予想もしなかった王位を手に入れさえした。彼は自分の進んで行く道に行きどまりがあろうなどは夢にも思わなかつただろう。しかし、彼が支配する国にあらたな疫病が流行しはじめたとき、彼の前進はたちまち停止し、彼はあともどりしなければならなくなった。いままで否定し、遠ざけてきた予言の文脈を再検討し、その中にかくされている真実を発見するため、彼はさまざまな方法を考えねばならなくなった。

予言(情報)が与えられ、それとはまったく相異なる道を進まざるをえないオイディプスにとっては、その一步一步は先例のない選択であり、彼個人の意思によって道が切りひらかれることは、いわば彼の個性の表出を意味する。彼の道をさまたげるものがあればそれを排除し、困難な謎に直面すればあえて挑戦する、そうすることによって、彼の道は未来に通じていることを彼自身確認してきたのである。したがって疫病というアポリアもまた彼の意味によって解決しうると考えるのは当然であろう。しかし、それは未来に通じる道ではなく、過去をあばく道であった。

2

ここで、私たちは言語の仮構性に思い至る。或る一つの情報はかならずしも一つの意味を伝えるわけではない。しかもその意味は、情報によっては多様であり、つねに情報そのものは時間的な慣習と空間的な環境にささえられて成りたっているのだから、情報の発信者と受信者とのあいだに情報を成りたさせる慣習や環境に大きな齟齬があれば、目的とする情報の意味は疎通しない。多様な意味がこめられている一つの情報が、適切な意味をもった情報として伝達されるには、慣習と環境とを広い範囲にわたって共有する「場」が必要である。私たち各人が同一の場で生活することは不可能であるから、私たちの情報理解は語の意味のこまかいニュアンスのちがいが文脈の意味の大きな流れのちがいに至るまで、さまざまなちがいが生じる。できるかぎりそのちがいをなくすには、私たちの慣習と環境の差異を縮小して、共通性を増大することが必要である。そのような場においてのみ、コミュニケーションは可能であり、情報伝達あるいは情報交換の目的も達成されるだろう。

ここで言われる慣習、環境ということばについて簡単に説明しておこう。慣習とは広い意味で規則あるいは規約である。言いかえれば、人間の日常的思考および行為を支配する必然的規則（規約）である。人間の思考・行為は表層的に、あるいは深層的にかならず規則性をもつ。日本に生まれたものは日本語を話さねばならないという規則は表層的には存在しないが、深層的には日本で生まれ、日本で成長すれば日本語を話さざるをえない。その規則性を生成せしめるのが環境である。環境は規則が成立する条件であるということもできる。慣習と環境との関係、したがって規則と条件との関係は、相互依存によって成りたつが、規則は自己の力によって規則を変えることはできない。しかし、条件は規則の外部にあって、たえず自己変革しつづけ、かつ多様性に富む。つまり、条件によって

規則は変わるが、規則によって条件が変わるわけではない。私たちの慣習はすべての環境に適応するのではなく、特定のえられた環境においてのみ意味をもつのである。一つの言語、たとえば日本語が使用される環境はかぎられている。それは言語の規則性が結局は環境をえらんでいくことになる。また、えられた環境によって言語は成長する。つまり普及し持続するのである。

オイディプースにあたえられた情報は、三つの重要なキーワードから成りたっている。「故郷」「父」「母」——これらが一つの文脈を構成すると、「故郷にもどるな。父を殺し、母を妻とするであろう」となる。おそらくこの情報の発信者は一つの確定的な文脈によって、発信者自身と共通の意味を受信者がうけとることを期待したのであろう。ところが、受信者が理解した文脈は、真の「故郷」をとりちがえたために大きなズレを生じてしまった。しかし、ほんとうの元因は発信者にある。なぜなら発信者である神は、オイディプースが自分の真の故郷を知らないことを知っていたはずだからである。神託をうかがいに来た本人に真の故郷がどこであるのかをつたえずに、どちらとも解釈できるメッセージをつくりあげたのだ。それは一種の虚構である。虚構ではあるがその情報は真実をのべている。そこに虚構のしくみがある。

スフィンクスのしかけた謎は、全体の文脈の意味、すなわち謎としての意味が明らかであり、また文脈を構成している一つ一つの語の意味も明らかであるにもかかわらず、正解が明らかではない。それは難解な数学の問題や計算の正解が明らかでないばあいとはまったく相異なる。まえにのべた予言のメッセージもふくめて、それらの情報を比較してみよう。

- (1) 故郷にもどるな。父を殺し、母を妻にするであろう。
- (2) 声は一つで、四本足、二本足、三本足になり、足がもっとも多いときに、もっとも弱

いものはなにか。

- (3) 鶴と亀の頭は全部で20, 足の数は全部で56.
鶴と亀はそれぞれなんびきいるか。
(4) 風が吹けば箱屋がもうかる。

(1)の記述は予言という形をとっているが、文脈は或る条件のもとで生じる結果をのべたものであり、元因と結果がわかっている、その両者をむすぶ経過が不明である。しかし始元と結果が明らかであれば、予言の目的は達せられる。経過がどうであれ、結果が明白であれば受信者は満足するのである。占いやおみくじの類は結果こそが関心の対象になる。しかし、(2)の謎は結果しか明示されていなくて、元因も経過も不明である。一つの明白な結果から問題の主体も理由も方法も問うことができるのが謎の特質であろう。謎を解く者は自分で理由も方法も考え、あるいは発見して、それがなにであるかをつきとめねばならない。元因となるものだけでなく、結果に至る経過をも明白にしなければならぬとすれば、それは仮構に仮構をかさねて結論に達するほかはない。私たちはまず第一に結果から始元へと逆行する。その過程で行きづまり、また結果へもどる。つぎに別の道をたどって始元へ向かう。そこでまた行きづまり、結果へもどる。あるいは途中で方向を転換する。こういうことがなんども反復され、なんとか始元Xにたどりつく。それまでに、私たちは途方もない数かずの想像世界をさまよいるわけである。Xにたどりついたにしろ、それは結果をもたらした始元、つまり謎の本体そのものであるかどうかはわからない。そこでまた数かずの想像をかけめぐらせて、一つのアイデンティティを特定する。そうしてやっと「結果はXである」と結論するが、その結論は正解であるかどうかは、だれも断定できないのである。それぞれの者が自分の結論を正解であると思っているだけであり、だれかが一つの結論を正解と定めないうえ、正解は一致しない。オイディプスが(2)の答を「それは人間だ」と言ったこ

とに対して、スフィンクスは「ちがう」と断定することもできたはずである。なぜなら正解は彼女しか知らないのだし、また正解を決定するのは彼女だからである。たとえば、「それは猿だ」と答えたとしたら、それは正解の圏内に入るにちがいない。杖を足と考えるほどの比喩がゆるされるならば、尻尾を足と見なすことも可能であろう⁶⁾。スフィンクスは正解と心中ひそかにきめていたことを、人間にずばり言いあてられたとき、その怪物は知性よりも感性でそれをうけとめ、「Nai」(そうだ)とも“Oxi”(ちがう)とも言えずショック死したと思われる。

(3)は「鶴亀算」を知らない者が、(2)の文脈とおなじように考えたとしても、答を出すことができるかもしれない。そこに集まっている鶴と亀は怪獣の仲間と考え、めいめい勝手に答をはじき出せばよい。しかし、このばあい、「鶴亀算」について少しでも知識がある者ならば、その規則がただちにこの文脈を一つの共通する類型へと決定づけてしまうだろう。その結果、多くの者が一致した結論(正解)に達するにちがいない。それはまったく型どおりであって、型やぶりの想像世界をさまよる余地はほとんどない。その文脈が意味しているものは、「AならばBである」「AでなければBでない」という釈然とした論理そのものである。通路にたとえるなら、紆余曲折した道路ではなく、直交する直線道路であり始点から目的地まで首尾一貫している。そこでは交通規則さえ守っていれば、事故を起したり道にまよったりする心配はおそくないだろう。(3)のような文脈に接すると、多様にありうる意味も、その規則性によって一様の意味に収束してしまうのである。

(4)の文例は始元(元因)と結果は明白であるが、経過は不明である。「風」によって生じる結果が「箱屋」に結びつく必然性を、この発信者は受信者の推理にゆだねている。受信者は元因と結果を直接結びつけることは不可能であることを知ると、この文はいったいどういう情

報をつたえようとしているのかを再三検討するだろう。それは(1)の予言のようでもあり、(2)の謎のようでもある。しかし、始元も経過も不明であるような(2)の文ではないことはたしかである。(1)は始元から結果に至る過程が不明であっても、その因果関係は時系列にそって成りたち、運動する行為者(生物、非生物をとわず)全体が運動の前後において相異なる環境を関係づけて行く。(4)は(1)とおなじく経過は不明であるが、因果関係は場系列に属し、行為主体は飛躍するかのよう場を移動しながら始元から結果へ達する。その運動は行為者全体ではなく、その部分によって前後の環境が関係づけられている。つまり、(1)は必然性の全体的連続を主体とするのに対し、(4)は偶然性の部分的連続を主体としていると言えるだろう。さらに言いかえれば、(1)はきわめて realistic (現実的) であるが、(4)はかぎりなく fantastic (空想的) である。これを別の例文でしめすとつぎのように比較することができよう。

(1)-1 太郎が風邪をひくと、くしゃみをする。

(4)-1 太郎が風邪をひくと、犬がくしゃみをする。

太郎が風邪をひいてその結果くしゃみをするのには必然性がある。しかし太郎が風邪をひいても、その結果として必然的に犬がくしゃみをするとは現実に考えにくい。もしそういうことがあるとすれば偶然としか考えられないだろう。「風が吹けば、箱屋がもうかる」というメッセージも受信者としては空想に依存してその結論を納得するほかはない⁷⁾。これに類する文の構成に、ダブリット (doublet) ということばあそびがある。「頭は尾である」といきなり言われても、頭と尾は容易に結びつかないが、最初の語「頭」(head) と最後の語「尾」(tail) とのあいだに、いくつか単語をおいて、それぞれ1文字だけ変えて「頭」を「尾」に変えればよいのである。たとえば、head→heal→hell→tell→tall→tail というぐあいに、これは隣接する語が意味上なんの関係もないにもかかわらず、

一つの規則によって結びつけられ、部分的共通性によって文脈を構成しているわけである。「尻とりゲーム」はその一つの変形である。もっと連想をはたらかせると、Lewis Carroll のシャラード (文字あて遊び) のように、詩の形式によって情報をつたえることもできる。

My First is singular at best
More plural is my Second
My Third is far the pluralest—
So plural-plural, I protest,
It scarcely can be reckoned!

—A Charade⁸⁾

わたしの一番目はどう見ても一つだけ

それより数が多いのは二番目

三番目はとびきり数が多い——

あまり数多くて、わたしは抗議する、

それじゃとてもかぞえきれないぞ!

詩行はさらに5連つづくが、このメッセージが意味するものは、結果の説明である。どうしてそうなるのか、またそれがなんであるのか、という経過や始元についてはなにも示されていない。内容は(2)と同様に、まったく謎にまつまれている。しかしキャロルは謎の元因がなんであるかを知っている。彼は“I-Magi-nation”と言いたいのである。つまり、この詩(情報)を通じて、結果をしらせることにより、元因を説明するための或る種の規則を説明しているわけで、その説明は真実をのべている。説明された結果が元因と一致するからである。このように結果だけ示して、元因や経過を連想もしくは想像によって意味づけ、一つの文脈を完成することも、言語をメディアとするコミュニケーションでは重要な方法にちがいない。「風が吹けば、箱屋(後世では桶屋)がもうかる」という事例も、『東海道中膝栗毛』の中で、弥次郎兵衛が「さて風が吹いたからといって、箱屋とはどういうわけか」と訊いたのに対し、六部(巡礼)が「江戸では毎日風が吹けば砂埃が立ち、

目をわずらって盲人がふえる。盲人たちは三味線を習って商売するほかはなく、三味線屋が繁盛する。三味線には猫の皮が必要なので猫の数が少くなる。猫が少いとねずみがふえる。そこでいろいろな箱がねずみにかじられ、箱屋がもうかる」という意味のことを、想像をたくましくして弁じているが⁹⁾、これはオイディプースの解法と類似している。始元から結果へと或る規則を創出して文脈を整理して行けば、経過が明示されなくてもメッセージは伝達されるのである。始元と結果をむすぶ中間項の一つ一つは、きわめて信憑性にとほしいにもかかわらず、ともかくそれらは事実の部分集合であり、それぞれがたがいに関連づけられるならば、一つの解は成立する。しかしその解が正答であるか誤答であるかは、解答者のだれも判定することはできない。それぞれの解は各自が創出した規則にもとづいて選択された結果であり、個性的であることはまぬがれない。しかしその個性的「解」は、でたらめでないかぎり、元の一つの文脈に還元できるので（すなわち「風が吹けば箱屋がもうかる」という文）、同時に共通性をもつ個体である。

3

どんな成文 (text) でもその内部と外部との両義性によって成りたっている。「富士山は美しい」と言えば、その文を構成しているそれぞれの内的要素、「富士山」「は」「美しい」が、一定の規則によって階列的に連続し、それと対応する外的要素、すなわち現実の「富士山」と呼ばれている山、あるいは写真や絵に描かれている「富士山」という山、あるいは記憶の中にある表象としての「富士山」という山などが、一定の条件によって階層的に選出される。助詞の「は」や形容詞の「美しい」は、選出された「富士山」という山の条件にくみこまれている形状や色彩、大きさ、ひろがりなどの属性として存在する。そこに存在する「山」は、物理的にも心理的にも、さらに社会的にも「富士山」

という名称によって選出された特殊な「山」である。「富士山」という山を見たことも聞いたこともない者には、このメッセージがつたえる山は存在しないのではなく、仮象の山として存在し、「富士山は美しい」という情報をその人の文脈になぞらえて理解するだろう。それが正しい情報であるかどうかは別問題である。正しいと判断される情報は、途方もなくひろがる言語環境のなかの一つの特殊な条件にすぎない。

(5)太郎は次郎よりも背が高い。

太郎や次郎という人物を実際に知らなくても、太郎や次郎にかわる人物が代置されて、この文をとりまく環境は空白を残すことなく整備され、メッセージの内部規則には少しも支障をもたらさずに文意は完結する。つまり外部条件と内部規則に齟齬はなく、その情報の意味は受信者に理解されるのである。「富士山は美しい」に対応する環境は多様に存在する。前にものべたように、それは少なくとも受信者の数だけはかならず存在する。内部規則と外部環境との最初の適応は決定的ではなく、選択的あるいは偶然的であり、その解釈や理解のしかたは個性的である。発信者の意図するものが、そのまま受信者につたえられると考えるのは、発信者の自由だが、結果は逆である。一つのメッセージは発信者の意図するものがなんであれ、メッセージ固有の規則によって環境をえらんでしまう。つまり意味を生じる。発信者もまたその瞬間、環境の一要員、つまり受信者の側に立たされるのである。意味にとって発信者は同時に受信者である。そういう関係において、発信者（発話者）の意図は表現の機動力であっても、意味の形成に直接あずかるものではない。しかし、N. Chomsky が Searle の説を批判して、「話し手が現実には抱いている意図は幅広くさまざまであり」「自分が言っていることの意味を明確にするなどともできないだろう」と指摘しているのはうなづけるにしても、彼がつぎのようにのべるとき、問題が生じるのではないか。

私はコミュニケーションをおこなおうと思わずに、もっとも厳密な意味で言語をつかうことができる。私の発話 (utterances) には明確な意味、正常な意味があるのに、それでも聞き手 (an audience) にかかわる私の意図などでこの意味を明確にすることはとてもできない。いくつか具体的な例をあげてみよう。大学院生のころ、私はかなり長い原稿を2年間書いて過ごしたが、その間ずっと私はそれが出版されるとか、だれかに読まれるとか思ったことはなかった。私が書くものにはすべて意味があったが、私の確信していることについてだれかが信じてくれるだろうなどということは一切考えもしなかったし、事実、聞き手が一人もいないことを当然だと思っていた¹⁰⁾。

ほかに税金不支払いの説明の手紙と、ヴェトナム反戦演説の例があげられているが、いずれも受信者あるいは聞き手は個人ではなく公的大衆である。それはよいとしても、チョムスキーが「コミュニケーションをおこなおうと思わずに」言語を使用できると断言するについては、コミュニケーションとはなにかという定義のようなものが必要である。当面の問題としては、コミュニケーションの二つの要素をとりあげておけば充分であると思う。それは「伝達」と「交換」である。伝達の形式とはまさしく予言、予測の形式であって、受信者からの反応をもとめない。また受信者がどのようにそのメッセージを解釈、理解しようとかまわさない。さらに「だれかが信じてくれるだろうなどということは一切考えない」し、「聞き手が一人もいない」としても「当然」のこととするのである。発信者 (発話者) は自己のメッセージにこめられた文意を告げればよい。チョムスキーがすくなくとも前記の引用で固守しているコミュニケーションの概念は、内部規則に忠実で外部環境に無関心な構図として表現されている。彼はまた“*Rules and Representation*”の中で、こうもの

べている。「まず、言語の機能とは何であろうか？言語の機能はコミュニケーションにある、あるいは、言語の『本質的目的』は人々が互いに意志の疎通をはかることである、などとしばしば言われている。(中略)この主張を評価することは容易なことではない。言語に『本質的目的』があると言うのはどういうことであろうか？たとえば、次のような場合を考えてみよう。私が書斎の静寂の中で或る問題について考えるとき、ことばを使い、また考えていることを文字にすることもある。あるいは聴衆が自分の言うことを理解しようとせぬばかりか考えようもしないことを充分承知していながら、単なる誠実感から自らの考えを率直に語る人の場合はどうであろうか？また内容についてはこれといった関心もなしに、ただその場の友好的な関係を保つためだけに交わされるくだけた会話などはどうであろうか？これらは『コミュニケーション』の例と言えるのでであろうか？もし言えるとすれば、聞き手がいない場合や、聞き手の反応が皆無であると想定される場合、また情報を伝えたり聞き手の信念や態度を変えようとしたりする意図を持たない場合の『コミュニケーション』とはいったい何を意味するのでであろうか？」¹⁰⁾このような諸例に見られるコミュニケーションのあり方は、どう見てもコミュニケーションの全貌をとらえているとは思われない。発信 (発話) 者がどのような考えでメッセージをつくると、またどのような受信 (受話) 者のことを考えようと、表現された文 (あるいはメッセージ) はそれ自体がもつ規則にしたがって生成すると同時に、それがデータとして占有する場の環境にくみこまれているので、もはや発信 (発話) 者の手に及ばない状態にたち至っているのである。静かな書斎でひとり日記を書いている本人にしか通じない暗号のようなものでないかぎり、いや暗号であっても、なんらかの意味をもったメッセージとして記録されることになる。それがほかならぬ「日記」なのである。表

現された主体である日記は、もはや記録者によって元にもどすことができない。表現されたものは、それを他人に伝達するか、しないかという意図とは関係なく、すでに公表されたものであって、他人に見られたいか機軸の奥か金庫にカギをかけてしまっておくまでの話である。それは表層的な操作であって、深層的には記録されたものは必然的に読まれるのが自然である。日記はすくなくともそれを書いた本人によって読まれるために存在する。ということは、その意図がどうであれ、書かれた日記はそれを書いた本人を、他人と同様に傍観者の立場に位置づけてしまうのである。つまりそれを読む者をすべて環境の一要員にする。

チョムスキーは言語内部の規則性を重視して意味をとらえ、言語外部の環境に関心を寄せていないが、言語外部に焦点をおき、しかもコミュニケーションを「交換」と見る立場から言語をとらえようとする Geoffrey N. Leech は、「コミュニケーションとは問題解決の過程である」と言い、チョムスキーとは対照的な見解をのべている。

話し手というものは、コミュニケーションを行なおうとする者として、「仮りに私が聞き手の意識にかくかくしかじかの結果を引き起こそうと欲するとするならば、この目的を言語の使用によって達成するのにもっともよい方法とは何であろうか」という問題に解答を与えなくてはならない。聞き手の方から言えば、解かなくてはならないもう一つの別問題がある。すなわち、「話し手がかくかくしかじかのことを言ったとして、話し手がそれによって私に理解させたかったのはどのようなことであったのか」ということである。コミュニケーションをこのように考えるということは、語用論 (pragmatics) というものに対して修辭的なアプローチをすることになる。

情報交換の見地からすれば、発信者および受信者の両者は、たがいに情報を理解しあうことが第一の目的となるだろう。その理解のしかた、あるいは理解のさせかたには、適切に意味を把握するだけでなく、文構造、統語論、音韻論、さらには人間環境にかかわる社会学、風俗習慣をふくむ文化等のすべての分野からのアプローチによる方法が考えられ、けっして「修辭的なアプローチ」だけすまされるものではないだろう。しかし、せまい意味での言語使用に限定するならば、文法的にも意味論的にも、あるいは哲学的にでさえコミュニケーションを実践することが可能である。いずれにせよ、情報交換がおこなわれるに際しての相互理解は、メディアである言語 (あるいは記号) を通じてのみ可能なのであるから、すべての了解事項はメディアおよびメディアの「場」として存在する環境のなかに内蔵されていると考えられる。人間もまたその環境の一部なのである。そしてまた言語もメディアの一部を構成していると言わねばならない。人間が言語の主体となるのは、なんの意味も形もないカオスの記号体が、時系列にそって相互に相異なる龐大な記号を生成しながら記号環境を構成し、その環境 (場系列) のなかで意味をふくんだ記号体系として人間に使用されている状態においてである。

コミュニケーションが「伝達」を主にするか、「交換」を主にするかということは、形式上区別できても、本質的には情報は時系列にそって生成し、かつ場系列にそって発展して行くのであって、両系列を分離して独立させることはできない。一つのメッセージの生成過程は、同時に形式と意味の生成過程であり、それは時系列にそって形式が生成されつつ、場系列において意味が発生して行くことをあらわしている。

(6)私は横浜に住んでいる。

このメッセージは、日本語文としてつぎのように配列しても意味はほとんど変わらない。

(7)横浜に私は住んでいる。

しかし、つぎのように配列すれば意味は混乱

する。

(8)住んでいる私は横浜に。

(9)住んでいる横浜に私は。

つぎのように配列すると、完全に混乱して意味を生じない。

(10)に私横浜はでいる住ん。

(11)るいでん住に浜横は私。

これらのうち、(7)が(6)とほとんどおなじ意味をもつのは、語の配列が規則的であり、かつ、日本語の環境に適応しているからである。(8)と(9)は語の規則に順応しているが、文の規則違反によって、意味がくずれた例である。(10)と(11)は語の規則も文の規則も無視され、適応すべき日本語の環境が完全に破壊されているので、意味の生じる余地がない。(11)は逆さ読みという規則に従って語が配列されているが、それはその規則に適応した日本語の環境を必要とする。目下、日本語にはその規則に適応する条件はないので、(11)が成立するためには、右から左へ読むという条件が必要である。もちろん、そのような条件をもつ日本語環境が存在するならば、(11)は完全な日本語文であることは言うまでもなからう¹³⁾。コミュニケーションが「伝達」であれ、「交換」であれ、なんらかのメディアを通じて、特殊な個体から一般的な類体へ意味を発現することにおいては、両者に基本的な相異はない。言語メディアでいうならば、一つの日本語のメッセージは、日本語を共通に使用する人びとによって、あるいは個人によって、さまざまな意味を生じる。しかし、その意味の多様はメッセージの多様ではない。(1)~(7)のいずれの文においても、その一つ一つは個体である。それ自体において、意味は明白であり、自己完結して、そこにある意味以外にありようがないと思われる。そういう意味で個性的なのである。ところがたとえば、「私は横浜に住んでいる。」という明白な意味をもち、まぎれもなく唯一の個性的な文も、或る環境におかれるとさまざまな問の答としてあらわれてくる。

(12)あなたは東京に住んでいるのか？

(13)あなたは東京に住んでいるのか、大阪に住んでいるのか？

(14)あなたは東京に住んでいるのか、横浜に住んでいるのか？

(15)あなたは日本のどこに住んでいるのか？

(16)あなたはどこに住んでいるのか？

これらの問のうち、(16)をのぞいては、すべて「私は横浜に住んでいる」という文が答になる。(16)のばあいは、「あなたはどこに住んでいるのか？」という問を発した場所が日本国内ではなく、外国であれば、おそらくその答は適切でない可能性が大きい。しかし、国内でしかも日本人によって発せられた問であれば、その文は適切な答となる可能性はほとんど100パーセントあると言ってよい。それもまたこの問が発現した環境によると言えよう。

一つのメッセージに対する環境の適応範囲はかぎられている。しかも質的に多様である。それにもかかわらず、それら多様な環境(条件)は、一つの個性的なメッセージをかかえこんで行き、それによってたがいに異質で形が相異なる環境を共通の「場」にしてしまうのである。つまり、(12)~(15)の各問は、それぞれの意味を異にする環境でありながら、それらが受容する結果は共通している。相互理解とは、このような共通性を核にして発展して行くものである。その発展の領域では、発信者と受信者というような明確な区別はもはやうしなわれ、共通の意味をもつ言語(あるいは文)の使用者として位置づけられる。言語の発展にとって、言語の使用者は第一義的な言語の創造者ではなく、言語の再生産者として言語を蓄積し、また消費する。言語は範囲を拡大しつつ反復重複して使用される結果、使用者間に共通する表現法が確立され、類型化する。各地方の方言(dialect)が横におしやられ共通語が普及したり、各国の言語にまじって英語が世界の共通語となる発展傾向などが、その好例と言えよう。

4

言語世界における共通性は、コミュニケーションが成りたつための頼みの綱である。それは、言語 (langue) が内部規則によって生成され、同時に外部環境の適切な「場」において意味を発現するとき、まず最初にもとめられる迷路脱出のカギなのである。生成 (創造) される文は唯一であっても、その文が受容される環境は多様であり、たとえ表面的に受けいれられても、内奥にすすむにつれ、使用者の誤用によって真意が理解されないことは大いにありうることであり、コミュニケーションがただちに迷路と化するのは私たちが日常しばしば経験するところである。その迷路から脱出するには、慣習によって生成された文と共通する場が受容される条件として存在しなければならない。それは、ソークラテースがクラテュロスとの対話でつぎのように言っていることにも通じるだろう。「したがって取りきめと慣用もまた、発現するときわれわれが思っているものを表示することに対して、何ほどこ寄与するということが必然的であるようだ。」¹⁴⁾この言明は、「ぼくが発音するとき君が認識するのであるならば、何らかの表示〔しるし〕がぼくから君に伝わるのではないか」という問につづくもので、これを言いかえると、対話者の一方が発話 (parole) したときに、他方が発話者とおなじものを認識するのは、規則と慣習によってきめられた両者に共通の表示 (symbole) が必要であるということになるだろう。これはきわめて重要な指摘であるが、しかし彼は言語問題の入口に立ちすくんで、指摘する以上に先へすすんではいない。つまり、言語のカオス状態を自然 (physis) と見るか法 (nomoi) と見るかの議論で終わっているように私には思われる。

このカオス的言語の実態は、現代言語学の研究では、音韻論、統語論、意味論、語用論等のように各分野へ分化し、それぞれの分野でさらに下部分化がなされ、そのシステム自体が単に

時系列的階列構造だけでなく、場系列的階層構造へと深化している。それは面前のカオスだけを見ていた人間の視点が、自分自身をふくめた環境へ移動し、言語世界をカオスから解放して人間社会に同化しはじめたことを意味している。文字どおり「語られたもの」としての「神話」(ギリシア語 *mythos* は物語の意) は、現代では「行動するもの」としての「神話」と化し、「いざなぎ景気」(1965~70) が生まれたり、橋梁安全の「神話」が阪神大震災によって崩壊 (1995) したりする。このように、それが抽象的にであれ、具体的にであれ、生成された或る個体(「神話」)は、それをとりまく言語環境に吸収されて一つの文脈を構成し、モデルとなる。以後、そのモデルさえあれば同類の文がつぎつぎと再生産されて、その個体は同時に類的社会の構成要素として発展し、その環境構造を説明する一つの軸となるのである。Lévi-Strauss の人類学における方法は、そのような発展軸にそった人間的事象解明への内面的なアプローチと言えよう。その方法について、Edmund Leach は、「言語による表明と観察された行動にいくちがいがある場合に、論理主義者がよく主張するのは、実際に起ったことよりも言語で言われたことのなかに社会的現実が『存在する』のだということだ」¹⁵⁾とのべている。これはレヴィ・ストロースだけではなく、チョムスキーの文規則に対する絶対優位論にも適合する。

構造主義論者や文法論者の意味に対しての視野は内面発展的であるが、文脈を接続面 (interface) とする外的環境への発展という方向ではいちじるしくせばめられて行く傾向が見られる。言語使用となるとそのまま文構造や文法の枠内にとじこめることができず、文そのものが情報過剰現象をまねくことになる。ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』で、公爵夫人が「もっと簡単に言いたければ」と前おきして、つぎのように言っている場面がある。

自分がかつてこうであった、あるいはこうで

あったかもしれないものが、自分はそのまへはこうであったものが他人にはそうでないと見えたであろうのとはちがうものではなかったと、他人には見えるかもしれないのとはちがうものではないと、自分自身を想像するな。
— *Alice's Adventures in Wonderland*¹⁶⁾

これは内部規則に順応しきれない情報の氾濫による文の錯乱状態である。結果的にはそうであるが、外的環境を整備したところで、この文の混濁を透明にすることは困難である。ということは文法内部にも原理的な規則を規則として成り立たせている内部環境が存在するにちがいないことを暗示している。公爵夫人とアリスの対話という外的環境のほかに、談話 A、談話 B を成り立たせるその談話 (discour) 集団は、個々の文脈に適応した環境としてえらばれている。また文脈も語階列の環境であり、語階列は音韻階列の環境であり、音韻階列は音素の環境であるというぐあいに、言語内レベルに環境が相応して連続している。それは人体で言えば、身体と器官との関係、器官と組織、組織と細胞、細胞と遺伝子という関係を連続して維持するそれぞれの環境 (境界ではない!) が存在するのと同様である。しかも環境構造は飛躍や省略なしに順序を維持して連続する階層構造である。したがって、言語における内部発展はこの階層構造にもとづく環境と階列構造による文規則との関係において生成する運動であると言えよう。

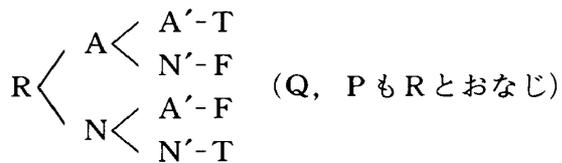
生物学的個の発生が、同時に類の発展として運動しつづけるのも、時系列的階列運動としての個性が接続面において、場系列的階層運動としての類性を容在するからである。沖縄南部のサンゴ礁域は黒潮と亜熱帯地方という環境 (あるいは接続面) において、個体であるサンゴの発生地であるばかりでなく、多種にわたる造礁性サンゴ類の宝庫でもあると言われる。このような生態学的生物の棲息には、個の繁殖によって類が形成されるのが常であり、生物は自然環境のなかで個として存在し、類として発展する。

これは先にのべた言語の個と類との関係にも適応する。ここで言う「個」の「存在」とは、個体として生成したものは死滅するまで個体であるという意味である。赤児が幼年→少年→青年→壮年→熟年→老年と変化するのは個体の成長であり、それぞれの過程で別の個体が発生するわけではない。しかも成長は不可逆性によって規定されているので、『不思議の国のアリス』でないかぎり、成長をもとにもどすことは不可能である。これと対照的に、共通性を述語とする個の集合体である類¹⁷⁾は、その共通の場において、個を結びつけたり、さらに高度の類の述語として上層の類を形成したり、その形成層をつぎつぎとかさねて発展する。この発展は可逆的であって、いくつもの層を行きつもどりつすることが可能である。たとえば、

- (a) 人間は生物である。
- (b) 人間は動物である。
- (c) 人間は脊椎動物である。
- (d) 人間は哺乳類である。

というぐあいに、人間についてさまざまな類型を形成することができるし、人間はこれらの階層を上下に移動して、いずれの類にも属することができる。このように共通項を結んで移動する「場」は、それ自体は個の創造の「場」でもある。それらがかさなりあうのは、現実的な「個」が抽象的な「類」によって階層構造にくみこまれるからである。このしくみこそ現実社会と虚構世界との環境を構成する接続面となるものである。私たちが或る見も知らぬ X という人から一通のコンサートの招待状を受けとったとき、「X から招待状が来た」と言う。この X という人物について、できるかぎりの方法で身元をしらべても不明であり、その結果さまざまな想像によってその人物を想定することになる。ということは、架空の人物 X から招待状が届いたことになるだろう。あるいは、不明の人物 X から招待状が届いたと言ってもよい。しかし、

発信人がだれであっても、一通の招待状が届いたことは事実であるから、「Xから招待状が来た」という陳述は真ではないと断定することはできない。また別の例をあげると、実在する友人Yから招待状が来ないのに、「Yから招待状が来た」と言ったばあい、この陳述は真ではないと断定できるだろう。それでは、実在しない人物Zから招待状が来ないのに、「Zから招待状が来た」と言ったばあいと、「Zから招待状が来なかった」と言ったばあいとはどうか。前者は真でなく、後者は真であると断定されるだろう。つまり、これらの陳述に対する真偽の判断は、文の述語部分とその文の連直面として或る環境（条件）と適応しているかどうかによって決定されたのである。主語にあたるものが実在するか、実在しないか、不明であるか、ということはまったく不問に付されている。しかし、それは内部的な環境適応であって、それぞれの陳述全体にかかわる外部環境との適応にもとづく判断ではない。いまこれらの文を整理してみるとつぎのようになる。実在する人物をR、実在するかしないか不明の人物をQ、実在しない人物をPとし、招待状が「来た」をA、「来なかった」をN、その陳述で「来た」をA'、「来なかった」をN'、その判断において真をT、真でないをFとする。



このうち真と判断されたTだけをえらんで整理すると、

R-A-A'-T, R-N-N'-T
 Q-A-A'-T, Q-N-N'-T
 P-A-A'-T, P-N-N'-T

つまり、内部環境AおよびNに適応する規則

A'およびN'が、それぞれ共通して真とされるのである。しかし、外部環境との関係、すなわちR, Q, Pをふくめたholisticな関係では、

(R-A-A'-T)-T, (R-N-N'-T)-T
 (Q-A-A'-T)-T, (Q-N-N'-T)-T
 (P-A-A'-T)-F, (P-N-N'-T)-F

というぐあいに、R, Qについては真であっても、Pについては真とは言えない。これを先ほどの文にもどしてみよう。

(「Xから招待状が来た」は真)は真。
 (「Xから招待状が来なかった」は真)は真。
 (「Yから招待状が来た」は真)は真。
 (「Yから招待状が来なかった」は真)は真。
 (「Zから招待状が来た」は真)は偽。
 (「Zから招待状が来なかった」は真)は偽。

なぜZの場合は真が偽となるのか。文規則に照らしてみると、たしかに「来た」ものは「来た」し、「来なかった」ものは「来なかった」と表現することは正しい。しかし、それは実在しないと判明している人物を実在しているかのように混同している結果である。逆に言えば、現実にはZは実在していると思わせるほど、文規則には実行力があるということである。Zは仮構のなかで実在した人物として認められる。神話や文学作品の仮構性は文規則とその環境のなかで、現実化する。つまり仮象世界から、Xの存在とおなじように表象世界へ容在し、YやXと共通する世界の対象として存在するのである。Yは現象世界に実在するといっても、招待状を受けた受信者にとっては、招待状そのものが実在するのであって、発信者は招待状のかなたへ否在しており、電話でもかけて呼び出し、情報を交換するとき、はじめて現象世界の対象者として容在化するだろう。そのように現象世界に容在するか、あるいはその可能性があるか、あるいはまたそれが不可能かという点で、Y, X,

Zのそれぞれはたがいに相異なる個体として存在する。「サンタクローズは実在するか」という問は、「昨夜、サンタクローズが私の靴下の中に贈物を入れてくれた」というメッセージによってその答が類別できるだろう。そこにもX, Y, Z, あるいはP, Q, Rの再現が見られる。その点に関して John R. Searle の仮構世界における「寄生的」言語使用という判断は疑問を生ぜしめるものがある。少し長いが彼の意見を引用するとつぎのとおりである。

この公理（存在公理と同一性公理—筆者註）に対する反証例は別の角度からも構成することが可能であるようにも思われる。たとえば、現在にも過去にも存在しないサンタクローズやシャーロック・ホームズのようなものを指示することができるか否かというものである。しかし、このような虚構の(fictional)（そしてまた、伝說的、神話的其他の）存在物を指示しているということは、真の意味での反例ではない。

なぜならば、それらはまさに虚構において存在(exist in fiction)しているからである。この点を明確にするためには、現実世界に関わる正常の言語使用から小説や演劇のような寄生的(parasitic)ともいえる言語使用の形態を区別し、他の言語使用から切り話す必要がある。現実世界に関わる正常の言語使用の際に、私は、シャーロック・ホームズを指示することはできない。なぜならば、そのような人物は存在していないからである。

——『言語行為』¹⁸⁾

仮りに小説や演劇が「寄生的ともいえる言語使用の形態」であるとしても（それが根拠のない言いがかりであることは明白であるが）、どのようにして「正常の言語使用から」「区別」することができるのだろうか。そもそも「正常の言語使用」とはどのようなものをさしているのだろうか。まさか日常会話をさしている

のではなかろう。ルイス・キャロルは彼自身でもりであったため、それを矯正するために、毎日シェイクスピアを朗読したほどである¹⁹⁾。シェイクスピアの作品が正常な言語使用からはずれていたら、キャロルはわざわざそんなことをするだろうか。しかしJ.R. サールは、「私が“Sherlock Holmes wore a deerstalker hat”（シャーロック・ホームズは鳥打帽を着用していた）と述べたとすると、事実私は一人の虚構の登場人物（すなわち、現実には存在していないが、虚構においては存在する登場人物）を指示しており、また私の述べたことは真である」²⁰⁾と云って、現実の発話者の陳述と虚構の登場人物の服装が一致していることによって、自分の陳述を真と断定している。そういうことで、はたして寄生的言語使用を正常の言語使用から区別したことになるのだろうか。それは先ほどの(P-A-A'-T)の型であり、それは結局F(偽)と断定されるのである。文学作品はこのFという断定を出発点にして、あらたな環境を創造し、T(真)に達することを目指しているのである。虚像を通じて真実を描くとは、こういうことなのだ。

言語メディアのコミュニケーションが、情報の伝達と交換をおこなうことをその第一義的機能とするなら、その方法として、いかなる手段であれ、(1)予言(予測)的方法か、(2)謎的方法か、(3)迷路的方法か、(4)カオスの方法があげられるだろう。(1)は一方向的伝達、命令であり、(2)は意思決定に対応し、(3)は計画実行の検索を、(4)は想像力による個性的創造を内包している。これらはいずれも言語内部の規則性、慣習にささえられ、言語外部の環境を同化しつつ共通の「場」において意味を発現するプロセスなのである。性急の感をまぬがれないが、このように同化現象をとまなう発展を私は「文明」の本質的な要素と考えるのである。

註

1) この引用は Robert Graves, *The Greek Myths*,

- 1955, Penguin Books, Vol. II, p. 10, 105e による。Sphinx の謎の表現は text によって相異なる。Apollodorus, *Bibliothēke*, 2Vols., The Loeb Classical Library, 同出版社の Diodrus Siculus, *Bibliothēke*, 12Vols. 参照。
- 2) Apollodorus, *op. cit.* III, 5. 高津春繁訳『ギリシア神話』, 岩波書店, 昭32, p. 133.
 - 3) すくなくとも Apollodorus が伝えるところでは, オイデプースの出生を知ることだけが, デルポイへ赴いた理由になっている。
 - 4) R. Graves, *op. cit.* vol. II, p. 9, 105c.
 - 5) Euripides, ΦΟΙΝΙΣΣΑΙ (19-20) では, つぎのように言われている。「もしも息子をもうければ, その子がおまえを殺し, おまえの一家はすべて血を流すことになる。」The Loeb Classical Library, London, 1950.
 - 6) この謎の答については, いくつかの疑義が知られているが, 吉田敦彦は「オイディプース」を正解としている。『スピュクスの謎の正解とオイディプース』, <現代思想>, 1982, 3, pp. 104-113. 青土社。
 - 7) 「風が吹けば, 箱屋 (桶屋) がもうかる」については, その解釈がさまざまである。一説には乾燥期にはどこの家でも桶のたががゆるむから, このように言ったものかとして, 「大風が吹けば桶屋が喜ぶ」とおなじと見る。『新編故事ことわざ辞典』鈴木棠三編, 創北社, 1992. しかし, 『江戸語大辞典』(講談社, 昭・49) 編者前田勇は, 「風が吹いたによって箱屋」をあげ, 嘉永4年の『雨宮窓閑話』には箱屋を桶屋としていると指摘。「風が吹けば桶屋が儲かる」は諺としては見えないという。『東海道中膝栗毛』(十返舎一九) 二編下には, 弥二と北八が木賃宿で泊り合わせた六部 (巡礼) の身上話の中に, 大風が吹けば箱屋がもうかる例が出てくる。
 - 8) Lewis Carroll, *The Complete Works of Lewis Carroll*, with an introduction by Alexander Woollcott and the illustrations by John Tenniel, London, The Nonesuch Press, 1977, pp. 806-7.
 - 9) 『東海道中膝栗毛』二編下, 中村幸彦校注, 日本古典文学全集49, 小学館, 昭50, p. 134.
 - 10) Noam Chomsky, *Reflections on Language*, Pantheon Books, New York, 1975, p. 61.
 - 11) Noam Chomsky, *Rules and Representations*, New York, Columbia University Press, 1980. 邦訳『ことばと認識』一文法からみた人間知性一, 井上和子, 神尾昭雄ほか訳, 大修館書店, 1986, pp. 309-310.
 - 12) Geoffrey N. Leech, *Principles of Pragmatics*, Longman Group Limited, 1983. 『語用論』池上嘉彦, 河上誓作訳, 紀伊国屋書店, 1987, xii.
 - 13) 日本語の横書きで, かつて右から左へ書くことはあったにせよ, それは見出し語や短文等にかぎられている。現在でもデザインや広告, また自動車の右車体に記載される横書きの商店名, 所有者名などは, 文規則に違反してでも, 文の環境調整, 条件づくりを優先させている。その結果, 「一タンセ越引 NAPAJ」が町中を走りまわることになる。
 - 14) J. Burnet, *Platonis Opera*, 5vols, Oxford Classical Texts. 水地宗明訳『クラテュロス』一名前の正しさについて一, プラトン全集2, 435B, 岩波書店, 1974, p. 155.
 - 15) Edmund Leach, *Culture and Communication*, The logic by which symbols are conected, an introduction to the use of structurist analysis in social anthropology, Cambridge University Press, 1976.
 - 16) Lewis Carroll, *Alice's Adventures in Wonderland*, The Complete Works of Lewis Carroll, with an introduction by Alexander Woollcott and the Illustrations by John Tenniel, London, The Nonesuch Press, 1977, p. 89. 原文をあげると「Never imagine yourself not to be otherwise than what it might appear to others that what you were or might have been was not otherwise than what you had been would have appeared to them to be otherwise.'
 - 17) Aristoteles は, 不完全ながら10この最高類をあげ, 「一方の類が他方の類に従属するという関係にある場合には, その二つの類には同一の『種差』が存在するとしても, 何もさしつかえはない」とのべている。『範疇論』三, 松永雄二訳, <アリストテレス全集>, 岩波書店. Aristotle, *The Categories*, H.P. Cooke, The Loeb Classical Library.
 - 18) John R. Searle, *Speech Acts*, an Essay in the Philosophy of Language, Cambridge Univ. Press, 1969. 『言語行為』一言語哲学への試論, 坂本百大・土屋俊訳, 勁草書房, 1987, p. 141.
 - 19) アイザ・ボウマン『ルイス・キャロルの想い出』, 拙訳, 泰流社, 昭58, p. 19.
 - 20) John, R. Seale, *op. cit.* p. 142.
- [かわそこ しょうご 横浜国立大学経営学部教授]